

---

# 賽銭どろぼう眞琴くん

西村眞琴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

賽銭どろぼう真琴くん

### 【Zコード】

Z5501Z

### 【作者名】

西村真琴

### 【あらすじ】

真琴は田舎の神社でよく遊ぶ男の子、神社に祀られてあるキッネの神様が好き。友達の弘とは親友だ。

ある日、真琴と弘が神社の境内で遊んでいると、りんごと言つ女の子が現れた。3人は友達になつて遊び始めるのだが・・・

## 第一章 キツネの神様（前書き）

ちょっとと思いつきで書き始めてしまいました。なので明確なストーリーはありません。思いつくままに書いて行きたいと思います。よろしくお願い致します。

氣まぐれ者のサラリーマン素人作者の為、ストーリー展開が非常に遅いです。気長に更新を待てる人だけお読み下さい。

## 第一章 キツネの神様

真琴は神社の鳥居をくぐると奥に祀られたキツネの神様に挨拶をした。

「キツネの神様、今日はガムあげるしな、後で返してな

そう言つて左のポケットからガムを一枚取り出すと賽銭箱の上にガムを置いた。

「弘君、ビー玉遊びやろか

「うん、やろひやろひ

友達の弘と真琴は地面に穴を掘り始めた。弘は穴を掘り終えると真琴に手を出した。

「じゃんけん、ほい！」

「あいこでしょ！」

「あちやー負けた、弘が先や！」

「よつしゃー！ 真琴、今日は負けへんからな！ 昨日の敵じゃー

「帰り討ちにしたるわい！」

真琴と弘のビー玉遊びはいつも真剣勝負、弘は手堅く地道な戦法で、真琴は一攫千金を狙う戦法だ。勝率は弘の方がちょい上だが、真琴が調子に乗った時の爆発力は凄かった。

一人は掘った穴から遠ざかると足で地面に線を引いて、その線上に並んだ。

「よし行くぞおー真琴！ それえ！」

弘は穴をめがけてビー玉を投げた。

「あひやー、外したかあ！」

弘のビー玉は穴の淵でぐるっと回って神社の木の根元に止まった。

「ほな、次は真琴やし」

「見とけよ弘！一発で穴に入れるしな！必殺！反射衛星投法！おりやー！」

「なんじやそれ……？」

真琴が勢いよくビー玉を投げると、ビー玉は穴の方ではなく神社の敷石の方に飛んで行つた。

「真琴、どー投げてんねん？あつ凄ー！」

ビー玉は敷石に当たると向きを変えて、穴の方へ一直線に転がつた。

「いカえー！」

真琴のビー玉は穴に直撃して大きく跳ね上がり、弘のビー玉より少し奥で止まつた。

「わちやーー！弘の餌食やん！最悪やしー！」

真琴は頭を抱えた。

「チャーンス！頂きやしなあ真琴！宇宙の端まで飛んで行けー

「！」

眞琴のビー玉は弘のビー玉に弾かれて神社の端まで吹っ飛んだ。

カツチーン！

「わわわやーーー！」

眞琴は両手を上げながら走ると自分のビー玉を追いかけた。

「お先きにいーーー！」

弘はビー玉を握ると次の穴をめがけてビー玉を弾いた。

神社の端には山の神さんが祀られてあった。

眞琴はポケットからまたガムを一枚取出すと山の神様の小さな賽銭箱の上にガムを置いた。

「はい、山の神様もガムあげるしなあ、後で返してやーーー！」

眞琴は小さな祠に手を合わせるとビー玉を拾つた。

「山の神様パワーーーー！」

眞琴が勢いよくビー玉を弾くと、ビー玉はキツネの神様の下の敷石に当たつた。

カツチーン！

ビー玉は向きを変えて勢い良く転がり、穴に向かって一直線に進んだ。

ポーンと音がして見事に穴に入った。

「よしやーあー！」

「うわー！ ようやくなんどこから入れるなあ眞琴・・・天才やん！」

「あつたり前やん、山の神様パワ～！」

眞琴は得意げに右の拳を上げた。

「ガム食べよつと」

神社の境内を横切つてキツネの神様の前にくると、見かけない女の子がキツネの神様の賽銭箱に座っていた。

「あれ？」

キツネの神様の賽銭箱を見ると、さつき置いたガムが無くなっていた。

女の子は口をもぐもぐしながら眞琴を見ていた。

「わちやあ、キツネの神様のガム食べたん？ お前誰？」「つや」

女の子は口をもぐもぐしながら答えた。

「それ、俺のやしなあ、返してやあ」

「無理」

女の子は愛想なく返事をした。

「眞琴、誰や、その子？」

弘もキツネの神様さんの前にやつってきた。

「りさや」

「お前の友達か？」

「知らん」

眞琴と弘は顔を見合わせて、キツネの神様の賽銭箱に座つて口をもぐもぐしている女の子眺めた。

## 第一章 ハーＨの殺し屋

眞琴は両手をポケットに入れると首を傾げた。

「お前、どこから来たん」

「ここ」

りさはキツネの神様の祠を指さした。

「ええ？ うそやん、それキツネの神様の家やし」「やうよ」

つわはもつ一度キツネの神様の祠を指さした。

「お前キツネの神様なん？」

「違う」

りさは愛想なく答えた。

「じゃあ何やねん！」

「キツネの神様の娘」

眞琴と弘は顔を見合せた。

「祟じやあー！」

「キツネの神様の祟じやあー！」

二人は両手を上にあげると境内を走り回った。

そして境内を一周していくと、りさの前に戻つて來た。

「あほー！ そんなわけあるかあー！」

眞琴はわざわざつとポケットからビー玉を1個取り出してつむぎに渡すと、  
よいと投げた。

つむぎは眞琴の投げたビー玉を両手で受け取ると不思議そうに眺め  
た。

「これ何？」

「ビー玉やん」

「ビー玉？」

「知らんのかいなビー玉」

「知らない」

「ほな教えたるわあ、それ使つてええしなあ

「俺も1個貸したるわあ、つむぎ」

弘もビー玉をポケットから1個取出すとつむぎに渡した。

「ひつむぎじゃなあ、つむぎ」

「ひつむぎ、ひつむぎ」

眞琴と弘は手招きをしてつむぎを呼んだ。

「あたし本当にキツネの神様の娘なんだけどなあ···」

つむぎは少しく躊躇と眞琴と弘にちらついたビー玉を眺めた。

「まあいいか、どうせ暇だし···」

つむぎはビー玉をぎゅっと握ると賽銭箱から降りた。

「まあは、」の線からなあ、ベー玉を投げるねん」

「何処に?」

「そこに穴があつてゐやしない」

「うそ」

「まあ、あそこの一番遠い穴に入れるねん」

「ふーん」

つせはひょことベー玉を投げた。

ポン

ベー玉は一発で穴に入った。

「えつ?」

眞琴と弘は顔を見合せると両手を上げてまた境内を走り始めた。

「祟じやーー」

「キツネの神様の祟じやーー」

「あやあー、祟よー キツネの神様の娘の祟よー」

つれも眞琴と弘の後ろについて走つた。

「なんで、おまえが一緒に走るねん」

「わあ?」

眞琴と弘は後ろから走つてくるつをを見て立ち止まつた。

「おまえ、上手やなあ、ベー玉、一発で穴に入つたやん、キツネの

魔力があ？」

「そんな力ないわよ」

「なんやあ、キツネの魔力と違つんかいな」

「違う」

つせは両手を上げながら答えた。

「何や、偶然かいな、しょうもなあ」

眞琴と弘は元の位置に戻るとビー玉を投げた。

「あちやあ、あかん、入らんわあ」

「俺もや」

「ほな、つせが一番やしな

「次はどうするの」

「次はなあ、いつやつてビー玉を弾いて2番目の穴に入れる

「うん、うん」

「俺が、弘のビー玉に当たってもええしな

「そうしたら？」

「2番目の穴に進めるんや

「ふーん」

「そんでなあ、最後に元の穴に帰つてきたら、殺し屋になれるねん

「殺し屋つて？」

「殺し屋やん、殺し屋に当たられたビー玉は死ぬねん、殺し屋はそのビー玉を貰えるねん

「へえー面白そうね」

「最後に生き残ったビー玉の持主が勝つんや、真剣勝負やしな

「わかつたわ、こうね」

眞琴がビー玉のルールを説明すると、つせはこきなり眞琴のビー

玉を自分のビー玉で弾いた。

眞琴のビー玉はさりとのビー玉に弾かれて神社の端まで吹っ飛んだ。

「キュー

眞琴はまた両手を上げて自分のビー玉を追いかけた。

「お先に

つやは次の穴にビー玉を進めた。

「おぬし、なかなかやるのう

弘がうさの腕前を褒めた。

「次あんたの番よ

「よしあ、つや、負けへんぞう

弘は最初の穴にビー玉を入れるところの後を追いかけた。

## 第三章 必殺2段飛ばし

神社の南の端には竜の神さんが祀られてあった。

「これ、最後の一枚やし、竜の神様にあげるわ」

眞琴はポケットからまたガムを一枚取出すと竜の神様の賽銭箱にガムを置いた。

「よし、竜の神様パワーで逆転やし、竜の神様パワー」

眞琴は自分のビー玉をひりひりと勢いよくビー玉を弾いた。

カツチーン！

ビー玉は竜の神様の縁石に当たると向きを変えて勢い良く転がり、穴に向かって一直線に進んだ。

ポコーンと音がしてまた見事に穴に入った。

「よしゃーあ！」

「うわっ！ またかいなあ！ 真琴！ やっぱり天才やん！」

「あつたり前田のクラッカーやん、竜の神様パワー！」

眞琴はまた得意げに右の拳を上げた。

「ああつ、竜の神様が眞琴に力を貸してやる」

つたは竜の神さんの方を指さした。

「ええっ？」

眞琴は竜の神様の方を振り向いた。

「俺、竜の神様見えへんし」

「竜の神様、反則よ」

りさは竜の神様の祠に歩いて行くと何か呪文のよつな言葉を唱えた。

「りさ、何してんねん」

眞琴がりさに訪ねた。

「封印、あんたの後ろに山の神様と竜の神様がいる」

「はあ？ 封印？」

「神様のご加護は無しよ、真剣勝負なんだから」

「えつ、厳しいなあ、りさ」

「あたり前田のクラッカーでしょう」

「それ、俺のセリフやん」

りさは少し笑うとちよつと右目を閉じて眞琴に軽くウインクした。

「眞琴、やんぞ」

「おっしゃ、やんぞお、りさと弘に逆転じやあ」

眞琴は穴に入つたビー玉を拾つと弘のビー玉を手がけてビー玉を弾いた。

カツチーン！

弘のビー玉が弾け飛んだ。

「キュー！ 悪魔や！」

今度は弘が両手を上げて自分のビー玉を追いかけた。

「え～続きまして～」

眞琴はつたのビー玉を狙つてビー玉を弾いた。

カツチーン！

つたのビー玉も弾け飛んだ。

「キュー！ 悪魔よ！」

つたも両手を上げて自分のビー玉を追いかけた。

「ははは、見たか必殺2段飛ばし！ それじゃあお先に～」

眞琴は2段飛ばしで次の穴に進んだ。

## 第四章 めつねの神様の転勤

弘は神社の端まで飛んだビー玉を拾つとシャツでビー玉を拭いてまた地面に置いた。

「つやの番やし」

つやのビー玉は弘のビー玉の近くに転がっていた。

あつちの六は遠いから弘のビー玉に当たった方が早く進めるかしら？  
でも、失敗して弘のビー玉に当たらなかつたら……うーん悩む  
なあ……

つやは六を狙うべきか、弘のビー玉を狙うべきか少し迷つた。  
そして、自分のビー玉の前でしゃがみこむと考へこんだ。

「おまえ、尻尾あらへんなあ？」  
「えつ？」

つやは振り返つて後ろを見ると、弘がつやのスカートをめくつて  
いた。

「きやあー！ 何してるのよ！ 弘！」  
「尻尾生えてへんやん？」  
「ちょっとー もう！ バカ！」  
「バシツ！」

つやは弘の頭を叩いた。

「痛っ！ 何すんねん！」

「何すんねんじゃあないわよ！ もう一 罷るわよー。」

「へつ？ そんなん出来るん？」

「夢の中に化けて出てやるから！」

「へつ？ そんなんも出来るん？」

「そ、う、よ、キツネの神様の娘を怒りすと怖いんだからー。」

「何で尻尾無いんやろう？」

「ちょっと、あんた人の話聞いてないでしょ！」

「不思議やなあ？」

弘はりさの話を全然聞いていなかつた。

「だめだわ、こりゃあ」

りさは弘の顔を見て呆れると天を仰いで両手を上げた。

「りさ何してんねん？ 早よせいや」

「だつて弘がスカートめぐるんだもん」

「え、弘、りさのスカートめぐつたん？」

「うん」

「尻尾あつたけ？」

「あらへんし、真琴」

「ちょっと、尻尾なんて今時無いわよ、学校じやあ超ミニスカートなんだから」

「はあ？ 学校？ 何処の？」

「キツネの神様の学校よ」

「えつ？」

真琴は両手を上にあげると一瞬固まつた。

「つさ、おまえ言葉なまつてんない？」

「ばか！ あんたたちがなまつてるのよ！」

「えつ？ 俺ら綺麗な関西弁やんない、弘

「うん、めっちゃ綺麗な関西弁やし」

「関西弁がなまつてるんでしきうが、それに人の話全然聞いて無い

じやん」

「じやんやつて、ははは、東京弁やん」

「そうよ、東京のきつねの神様だからね」

「えつ、ほな、何でここにあるん？」

「お父さんが転勤したから」

「きつねの神様つて転勤するん？」

「そうよ、4年に1回転勤するの」

「ほな、今こりあるきつねの神様は東京の神様け？」

「うん、違う」

「なんで？」

「お父さんは別の神社にちょっとだけ単身赴任よ、私とお母さんでやつてるの」

「へえ、きつねの神さんの世界つてサラリーマンみたいやなあ、おまえ偉いなあ」

「そんなに褒めてもうひつたら照れるじやん」

つさは照れて少し頭をかいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5501z/>

---

賽銭どろぼう眞琴くん

2011年12月31日17時50分発行